

2021年6月26日

予選審査に関わる簡単なコメント

第32回高専プロコン（秋田大会）

審査委員長 松澤 照男

新型コロナウイルスの流行も2年目になり、多少慣れてきたとはいえ高専活動が様々に制約をされているなかで本年も高専プロコンを開催することにしました。今回も前回（31回、苫小牧）と同様に、オンラインの大会になりました。このような状況のなかで、課題部門に43作品、自由部門に54作品の応募があり、課題部門が前回よりも若干少なくなっているものの、応募総数では前回の85作品から97作品と大幅に増加し、関係者一同安堵しています。また、応募作品を概観すると例年に比べて遜色ない作品で、短時間でアイデアを実現可能なシステム提案にまとめ、さらに表現力も豊かでわかりやすい作品紹介になっていたと思います。学生諸君の平日頃からの準備と頑張りや熱意、さらには指導教員と様々な関係者のご支援とご尽力によって実現できたことで、あらためまして心から学生諸君および関係者各位に感謝と敬意を表します。

予選審査は、課題と自由部門ともに、「部門への適合性」、「独創性」、「有用性」、「技術レベル」「実現の可能性」などの観点で総合的に評価します。特に本コンテストは「独創性」が重視され、次に本選でのデモンストレーションを意識した「実現の可能性」や作品自体の「有用性」が評価されます。2つの部門にそれぞれに7人の審査委員が割り振られ、審査委員は割り振られた部門の作品を同一の基準で審査をします。審査委員はそれぞれの作品にA、B、Cの3段階で評価をし、それぞれの作品の合計点の上位が予選通過（今回はそれぞれの部門で15作品）します。以上のプロセスで予選が行われるので、審査委員が一同に集まって合議をして予選通過作品を決めるわけではなく、審査委員が対等の立場での評価点数の合計で決定されます。

審査委員には「独創性」を重視することは申し合わせをしていますが、どのような重みで重視するか、さらには有用性や実現の可能性についての重みなどは、審査委員のそれぞれの知識と経験によって異なります。そのために、大学などのアカデミアや様々な企業、さらには著述業やマスコミ関係者などからの審査委員で構成されていて、審査委員がそれぞれの観点で評価をすることにより、多面的な評価が行われるように配慮されています。

さて、今回も予選の通過ラインには多くの作品が集中し、僅かの差で通過と落選が決まりました。落選したからといって全面的に評価が悪かったわけではなく、僅かの差で不幸にも落選になったので、今後の取り組みによっては十分評価が変わってくるかもしれません。是非、コンテストとは別に作品を完成させ、高専祭などの別の機会に発表して欲しいと願って

います。

作品を最初に検討するときに、チーム全体で十分時間をとって「着眼点」から対象者（利用者）とともに「独創性」を明確にするために、高専学生の斬新な考え方で議論を深めることが重要です。その際、対象者を明確にして、対象者に合わせたシステムを検討する必要があります。その際には、現在は活動が制限されているかもしれませんが、対象になる人たちとの議論や交流も必要になります。一方、このときに陥りやすいのは、新しいソフトウェアや新しいハードウェアを使うことにより「独創性」を強調している作品があります。新しい技術を使いこなすことはそれだけ技術力が高いと評価されますが、逆にシステムのなかでこのような新しい技術を使う理由や必然性などが十分説明されてこそ、「独創性」として評価されます。新しい技術を使うことを目的とすることは本末転倒であることに留意してほしいと思います。

次に重要な点は、作品の「独創性」や特徴を明確にするために、中心となる技術課題を明確にし、この課題をどのような理論やアルゴリズムなどで高専学生らしく解決するかをより詳しく説明して欲しいと思います。この部分こそが高専プロコンの中心であり、技術中心のプロコンにしたいと願っています。出回っている技術（サブシステム）を寄せ集めたシステムを開発する場合がありますが、その時でも、サブシステムをインプリメントしたり連携させたりするための技術が必要な場合があります。このようにシステムを構築するために必要で重要な部分になると思いますので、十分な説明をしてこそ評価されます。

課題部門にコメントしたいと思います。今回の課題のテーマは「楽しく学び合える！」です。学びを「楽しく」さらに「学び合える」ためのシステム開発が望まれています。今回はどちらからと言えば「楽しく学ぶ」ことが重視され、「学び合い」については十分に考慮されていない作品がみられました。また、昨年に比べて応募数が少なくなったことから、今回のテーマは難しかったかもしれません。高専プロコン実行委員会には、次回以降のテーマ設定の参考にしてほしいと思います。

最後に、審査委員にとって予選審査は、逆に審査委員が試されていると思われれます。バラエティにとんだ応募作品のなかから高専の教育研究などの成果により高専の実力が紹介できるような作品が選ばれたか、また「実現可能性」についても応募書類のなかから本選までに実現できる作品が選ばれたか、さらには今日の多くの情報技術が日進月歩で開発や利用が進んでいる中で、類似がない「独創性」のある作品が選ばれているかなど、本選当日まで不安を持っています。本選では予選審査で予想した通りの作品になっているかが審査の楽しみであり不安な点でもあります。予選を通過した作品チームは、自ら提出した書類を念頭におき、審査委員のコメントを参考にしながらより質の高いシステムを完成させて欲しいと願っています。

以上が一審査委員としての簡単なコメントです。